

# 明治三陸地震津波時の景観・地名復原に関する基礎的研究

—山奈宗真の津波調査資料を活用して—

村中亮夫\*, 谷端 郷\*\*, 塚本章宏\*\*\*, 花岡和聖, \*\*\*\*, 磯田 弦\*\*\*\*\*

公益財団法人国土地理協会  
平成 27 年度学術研究助成報告書

2017 年 1 月 25 日

\*北海学園大学人文学部, \*\*立命館大学衣笠総合研究機構, \*\*\*徳島大学大学院総合科学研究部, \*\*\*\*立命館大学文学部, \*\*\*\*\*東北大学大学院理学研究科

## 第1章 序論

本稿では、1896（明治 29）年に岩手県三陸沖で発生した明治三陸地震津波による被害が記録された山奈宗真の津波調査資料（以下、山奈資料）を通して、明治三陸地震津波発生当時の景観・地名を復原することを目的とする。具体的には景観を構成する要素としての津波由来の地名（以下、津波地名）に着目し、その津波地名が地域のなかで災害の記憶継承に果たす意義について考察したい。

山奈資料は、南部藩出身の起業家である山奈が明治三陸地震津波の発生後に三陸沿岸の被災地を踏査し、集落レベルで死者・負傷者数、建物被害戸数、浸水範囲等を記した災害記録集から成る資料群である。なかでも『岩手沿岸古地名考』は山奈による被災地調査の当時、三陸沿岸に残されていたとされる 40 件の津波地名の示す場所や由来が記された地名集である。明治期の三陸沿岸における地図資料が極めて限られるなか、被災直後の現地踏査を基に描かれた地図を含む山奈資料は、当時の景観復原にとって第一級史料である（本資料群の詳細は第 3 章を参照）。

山奈をめぐるのは、山奈が明治期の遠野地方を代表する実業家であることもあり、多くの場合、郷土史家らによって郷土の偉人として紹介されている。山奈の起業家としての知名度は、明治期に刊行された Who's Who である『実業人傑伝』（実業人傑伝編輯所、明治 28-31 年、全 5 巻）においても紹介されるほどである。

一方で、学術研究、とりわけ災害研究の領域においては、もっぱら明治三陸地震津波の発生後、いち早く現地を踏査した人物として知られる。ほとんどの場合、山奈が学術研究で言及されるのは、山奈資料に基づく明治三陸地震津波の被災復原研究における研究資料の紹介にあたってである。管見の限り、山奈資料は 1980 年代に入って被害数値や津波遡上高（山下 1982；三陸町史編集委員会編 1989）、被害と地形との関係（菊池 1986；菊池 1997）の分析に本格的に利用され始めたほか、中央防災会議による明治三陸地震津波の総合的検証（中央防災会議 2005）においても参照されている。近年では、北原糸子『津波災害と近代日本』（北原 2014）によって大きく取り上げられたほか、蝦名・今井（2014）や蝦名ほか（2015）にみられるように、山奈が津波調査の過程で得た明治期以前の伝承類に関する分析も進んでいる。

上記、山奈資料に関する研究の略史のなかで、本研究の中心的な素材である『岩手沿岸古地名考』は、これまでほとんど扱われてこなかった。これは『岩手沿岸古地名考』が明治三陸地震津波の被害内容を直接示すものではなく、あくまでも調査の過程で得られた副次的な情報として評価されてきたからに他ならない。しかし、近年、津波に限らず、広く災害に由来する地名（以下、災害地名）に対する社会的関心が高まっているが（e.g. 楠原 2011；小川 2012；太宰 2012a,b；遠藤 2013；谷川 2013；楠原 2016）、災害地名はこれまで当該地域の人々が経験してきた被災の歴史を現代に伝えるひとつの媒体であり、その災害地名の復原作業は単に災害リスクの高い場所はどこなのかを現代の私たちが知るきっかけとなるばかりではなく、地域特性に応じた災害文化の継承のあり方を考える手掛かりを与えてくれると考えられる。

上記問題関心を踏まえ、本稿では平成 27 年度国土地理協会学術研究助成の研究成果として、『岩手沿岸古地名考』の翻刻・資料批判、および『岩手沿岸古地名考』に記された 40

件の津波地名の現状について報告する。なお、本報告書第 1 章の山奈に関連する先行研究の整理、および第 3.1 節における資料批判については、共同研究者の谷端を筆頭著者として学術雑誌に投稿中の文章を本学術研究助成の事業報告書用に編集した内容、また、第 3.2 節の現地調査報告については 2016 年 9 月 30 日（金）～10 月 2 日（日）に東北大学川内北キャンパスで開催された 2016 年日本地理学会秋季学術大会での報告内容に追加調査データを加えた調査内容である。

## 第 2 章 研究の方法

本稿では『岩手沿岸古地名考』について、大きく Step1「翻刻，資料批判」，Step2「津波地名の現状調査」の順に論を進める。それぞれの手順，資料は下記に示す通りである。

Step1 ではまず、『岩手沿岸古地名考』の資料の位置付けを明確にするために、山奈が明治三陸地震津波の後に三陸沿岸で調査を行った経緯やその実施内容，そして収集されたデータとそのデータが所収されている現存の資料群について概観する。この資料群のひとつである『岩手沿岸古地名考』は国立国会図書館に所蔵（以下，国会図書館本）されているが，この稿本にあたるものが遠野市立博物館に所蔵（以下，遠野博物館本）されている。そこで，両者の内容を比較することで、『岩手沿岸古地名考』の書誌学的な特徴を多面的に明らかにする。『岩手沿岸古地名考』の具体的な内容については序文と本文に分けて検討を加える。序文には本書編纂の動機が述べられていることから，その検討は本書の性格を議論するうえで欠かせない。本文には各津波地名の示す場所や由来が記されており，これらの記述に基づいて 40 件の津波地名の分布傾向，津波地名の示す空間スケール，由来を整理する。また，それぞれの津波地名の解説には，由来の記載で言及される津波の時期が注記として記されているため，併せて検討していく。

続いて Step2 では、『岩手沿岸古地名考』に記載されている 40 件の津波地名について，現在まで継承されているか否かを検討する。この検証方法として，本研究では現地における聞き取り調査を採用した。具体的には、『岩手沿岸古地名考』に津波地名とともに記載されている地名の由来に関する記述（注釈を含む）から，おおよそ地名が指し示す場所を絞り込み，その場所の住民の中で，①地名を知っている者が居るか，②地名の由来を知っている者が居るか，の 2 点に着目して聞き取り調査を実施した。ここで，本調査では地域住民に対する悉皆調査を採用していない。本研究の目的はあくまでも地名・由来が現在でも日常の地域社会の中に残されているかを検討することであり，本調査の方法で検証できるのは、『岩手沿岸古地名考』の地名の解説で示された小字ないしは旧村の各地理的範囲内に，調査時点で地名を認知している住民が確認されたか否かという点であることに留意する必要がある。現地調査は，2015 年 11 月 30 日～12 月 2 日，2016 年 2 月 23 日～26 日，7 月 21 日～24 日，10 月 1 日～3 日，11 月 5 日～6 日にかけて実施した。



第1図 地域概観図

基図：地理院地図

### 第3章 結果

本研究の成果として、下記第3.1節において Step1「翻刻，資料批判」，第3.2節において Step2「津波地名の現状調査」の各分析結果を報告する。

#### 第3.1節 翻刻，資料批判

##### (1) 書誌学的検討

##### a. 山奈による被災地調査，資料群

山奈による被災地調査の行程は、山奈の著した「日誌」<sup>1)</sup>に詳しい。「日誌」とは、『岩手県海岸巡回古文書拾集録』（遠野市立博物館蔵）に収録された鉛筆書きの一編である<sup>2)</sup>。「日誌」は、津波発生から約1ヶ月後の1896（明治29）年7月25日に書き起こされ、天気や調査した集落、面会人、宿泊先などが記載されている。書き起こされた25日は岩手県に建議していた被災地調査が許可された日にあたる。関連資料が残っていないために建議の詳細は不明だが、北原（2014）によると、この日以前に山奈は三陸沿岸の復興の手掛かりを求めるための調査の必要性を岩手県に建議していたと考えられている。山奈の意を受けて、岩手県は調査を許可し、同月27日に「海嘯被害地授産方法取調トシテ沿岸各郡巡回ヲ囑託ス」との辞令を交付した（北原 2014）。ところで、25日の「日誌」には、自身の建議が認められなかった場合には、独自に調査を実施する予定であった旨も記されており、山奈の被災地調査への覚悟が感じられる。

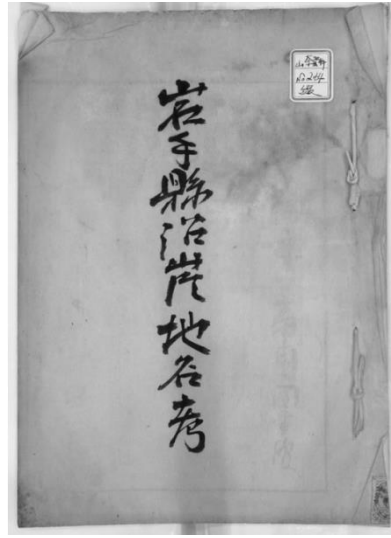
翌26日は県庁などで三陸沿岸の地図を写し取ったり、水路局（現在の海上保安庁海洋情報部）作成の地図を取り寄せたりするなど調査の準備に費やされ、27日には県庁にて県知事と面会し、県から被災地調査を委嘱されている。その際、担当者と調査項目について調整がなされ、24円90銭の旅費が支給された。調査項目については、『三陸海嘯被害地調査目』（遠野市立博物館蔵）で確認することができる。その内訳は「漁村ノ新位置」に始まり、「住家」、「漁民風俗」、「漁村制」、「凶荒調査」、「漁民需要品」、「海湾」、「海事考」、「漁村挽回」と多岐にわたる。『岩手沿岸古地名考』に通ずる調査項目としては、「海事考」の下位項目にある「津波の歴史」が挙げられる。

山奈の三陸沿岸の調査行程は、以下のとおりである。調査は、7月28日に県庁所在地の盛岡市を発ち、花巻町（現、岩手県花巻市）や実家のある遠野町（現、岩手県遠野市）を経由して30日に三陸沿岸の盛町（現、岩手県大船渡市）に出るところから始まる（第1図）。その後、一旦、高田町（現、岩手県陸前高田市）に南下した後は北上に転じ、9月9日に県境を越えて青森県三戸郡八戸町（現、八戸市）まで進んだ。調査期間は44日間に及んだことになる。八戸町到着の翌10日には山奈は岩手県庁へ出向き、調査完了の報告を行った。主な滞在箇所は、高田町や盛町、鶴住居村（現、岩手県釜石市）、大槌町、山田町、宮古町（現、岩手県宮古市）、久慈町（現、岩手県久慈市）などの三陸沿岸の主要町村で、これらの箇所では滞在期間が複数日とられた。

「日誌」によると、移動手段は、盛岡～花巻間と八戸～盛岡間で汽車が利用されたほか、時に馬や舟も利用された。道中では大嵐による渡船の欠航や河川の洪水による足止めなど、障害にも見舞われたという。また、途中案内人を雇うこともあった。宿泊先は、旅館のほか、病院、役場、個人宅であった。面会した人々は、郡長や町村長など行政のトップを務



a. 国会図書館本



b. 遠野博物館本

## 第2図 国会図書館本と遠野博物館本

注：国会図書館本は国立国会図書館デジタルライブラリーから転載，遠野博物館本は筆者ら撮影

める人物や、「多田，田口，指野三名北方ヨリ被害地調査シ来リ」（「日誌」より）の記述にみられる三陸沿岸の北部から南下してきた津波関連の3名の調査者，地域の有力者などであった。それぞれの滞在箇所では，周辺被災地の実地踏査のほか，主に地図や古文書の写しが行われた。このように「日誌」をみていくと，山奈の調査が，現地踏査を基本に，地元有力者への聞き取りや古文書など，被災直後という制約条件の中，手堅い方法によって進められたことが読み取れる。

この調査の結果をもとに編纂された資料を含む7点の資料が，山奈の手によって帝国図書館（現，国立国会図書館）に寄贈された。これらの資料は，「三陸大海嘯岩手県沿岸見聞誌一斑」完，「岩手県沿岸大海嘯取調書」甲乙丙丁，「岩手県沿岸大海嘯部落見取絵図」完，「大海嘯各村別見取図」，「三陸大海嘯岩手県沿岸被害取調表」，「岩手沿岸古地名考」全，「旧南部領岩手県地価沿革誌」全，の7点である。帝国図書館に寄贈されたのは，自身の調査報告が岩手県では尊重されず，資料の散逸が懸念されたためという見方が強い（菊池1997；北原2014）。

帝国図書館に寄贈された7点の資料群の中でも調査報告の根幹をなす『岩手県沿岸大海嘯取調書』では，『三陸海嘯被害地調査目』で挙げられた項目について村ごとに箇条書きで整理されている。このほか，『三陸大海嘯岩手県沿岸見聞誌一斑』は調査結果を町村ごとに再整理したダイジェスト版，『岩手県沿岸大海嘯部落見取絵図』は字レベルごとに地図入りで被害数値や津波遡上高が記載された付図，『三陸大海嘯岩手県沿岸被害取調表』は付表である。また，『大海嘯各村別見取図』もあるが，これは未完とされている（北原2014）。これらの調査資料について詳細に検討した北原（2014）では，山奈の調査意図は，「被害数値に現れない沿岸漁村の現状と今後の漁村挽回，すなわち復興の仕法を見出すこと」を念頭に置いたものであったと評価されている。



上述した資料5点が村別や字別にまとめられた総合的な調査報告であるのに対し、『岩手沿岸古地名考』は地名に特化した、テーマ性の強いものである。このことから、北原(2014)も指摘するように、『岩手沿岸古地名考』は、山奈の被災地調査資料の中でも異質なものとして位置付けられる。

#### b. 『岩手沿岸古地名考』の遠野博物館本と国会図書館本

『岩手沿岸古地名考』は、現在、国立国会図書館と遠野市立博物館に所蔵されている。遠野博物館本は国会図書館本の稿本として位置付けられ、前者のタイトルが『岩手県沿岸地名考』とされているのに対して、後者は『岩手沿岸古地名考』とされている(第2図)。ここで、遠野博物館本をはじめとする遠野市立博物館所蔵の資料群は、山奈の遺族によって寄贈されたものである。

遠野博物館本と国会図書館本の違いに目を向けると、遠野博物館本には朱色で修正が施され、基本的にはその修正が国会図書館本に反映されていると考えてよい。ただし、国会図書館本では送り仮名が揃えられているなど、遠野博物館本で修正が加えられた箇所以外にも文章表現の微細な変更箇所が多々認められる<sup>3)</sup>。両者の内容を比べてみると、大きく4つの相違点を指摘できる。第1に、遠野博物館本では漢字カナ交じり文が使用されたのに対して、国会図書館本では漢字かな交じり文が使用されている。これは、次章でも検討するが、識字率が低かった明治時代において、公的文書で利用されていた漢字カナ交じり文ではなく、より分かりやすい漢字かな交じり文で執筆することで、できるだけ多くの人々に読まれることを意識したためではないかと思われる。第2に、地名の所在する国名や村名の修正を確認できる。いずれの箇所も正しく修正されており、国会図書館本の作成にあたって慎重に情報の確認作業が行われたことが窺い知れる。

第3に、40件の地名のうち半数にあたる20件の地名の読みが変更されている。また、数は限られるものの、地名の表記自体が変更されているケースもみられる。たとえば、「鰻取畑」が「鰻取場」に、「於巻渕」が「芋巻渕」に、「メツカ沢」が「布カ沢」に、それぞれ修正されている。これらのことから、第2の点と同様、国会図書館本の作成にあたって情報の正確性に細心の注意が払われていたことが窺える。第4に、文末表現の修正である。たとえば、「ならやの如し」を「なるか」に変えて推量のニュアンスを変えたり、「という」を「なるか」に変えて伝聞から推量に変えたりするなど、得られた情報が聞き取りによるものなのか、自身の推察によるものなのかを慎重に区別しているといえる。

このように、国会図書館本の作成にあたっては、事実関係を慎重に確認したり、語句や文章の表現について推敲を重ねるなど、完成度を高めるための努力が払われているといえる。

## (2) 内容の分析

### a. 序文

まず、国会図書館本にみられる序文の前の署名について確認しておきたい。中表紙には山奈の署名に加え、本書が1897(明治30)年第2回水産博覧会に出品されたものであることと同時に、本書を帝国図書館に寄贈(本書では「出品」と表記されている)する旨が記されている。また、「明治三十六年十二月」の日付も認められる。一方で、序文の末尾には

第1表 『岩手沿岸古地名考』の本文・注

<p>No.1 <b>鮫ヶ淵</b> (サメカフチ) 岩手県は宮城県の境陸前国本吉郡小原木村の山谷に在る此地鮫ヶ淵と称し小原木村海濱より凡壹里拾丁許の山奥の澤に在り往古大海嘯の際激浪のため鮫魚うち上げられ居りたるより名称せしむといふ 按するに弘仁十一年或は貞観十年の大海嘯の当時ならんか No.2 <b>朽舟</b> (クチフネ) 陸前国気仙郡気仙村字長部港の山澤に在り此地海岸より凡壹里半往古大海嘯の当時山上の谷合に漁船激浪に打上られ海面に下る能はず故に船自然に朽れたるより朽舟と名称せしと云ふ 考ふるに慶長十六年十月廿八日大海嘯の際ならんか No.3 <b>鍋在り</b> (ナベアリ) 陸前国気仙郡気仙村字長部港の奥山字朽舟の内に鍋在りと名称せし地名に在り往古大海嘯の際鍋激浪に打上けられあるより名称せしなり 考ふるに慶長十六年十月廿八日海嘯の当時ならん No.4 <b>舟荒</b> (フナアラシ) 陸前国気仙郡小友村字矢の浦に舟荒と唱る地名に在り往古海嘯の際激浪に打上けられ船の破壊せしより名称せしと云ふ 考ふるに慶長十六年十月廿八日の海嘯或は明和年間の海嘯ならむ No.5 <b>駒込メ</b> (コマコメ) 陸前国気仙郡廣田村字長洞の内に在りむかし海嘯の当時駒激浪に打あけられ助りたるより駒込めと名称す昨明治廿九年六月十五日午後八時の大海嘯にも牡馬壹頭激浪に押上られ本村蒲生辰之助取押へ助けたりといふ 考ふるに寛永五年正月七日の海嘯ならむ如何となれば慶長年間の検地帳に右の地名見得す No.6 <b>集り</b> (アツマリ) 陸前国気仙郡廣田村字集りは往古大漁ありしとき漁民集合大漁の祝宴中大海嘯あり此地形海面より高き所は五拾尺低き所は五尺年号不詳と雖ども五月五日の内此所に集りたる漁民のみ命を失はすと云ふ故に集りと地名を唱へ今に至る迄毎年五月五日は字集近傍漁民記念祝儀を為しと云ふ 考ふるに凡そ四百年前明和七年の海嘯当時乎慶長年間伊達家の検地の際帳簿の字に集りと云ふあり明治廿九年六月十五日海嘯にも十一戸の内十戸流亡人口八十六人中死亡六十八人其内二人高さ五十尺の所へ打上けられたり No.7 <b>岩鞍</b> (イハクラ) 陸前国気仙郡廣田村字堂の前近傍に岩倉といふ地名あり是もむかし海嘯の当時馬の荷鞍岩上に押上げられあるより是をみて岩倉と名称せしと云ふ今に岩倉と書したる地名あり 考ふるに前全断 No.8 <b>淡采</b> 陸前国気仙郡廣田大字大野の内にあり是は大陽と大野との両方よりむかし海嘯に砂石押上げ森と成りたるより名称せしといふ 考ふるに本村大陽と大野は表裏の海浜なり当時海嘯尤激烈なるやの如し No.9 <b>鮫田</b> (サメタ) 陸前国気仙郡末崎村に字鮫田といふ地名あり明治廿九年を去る凡七百年前大海嘯の当時鮫魚田浦に逆浪のため押上げられたるより名称せしといふ 考ふるに文治元年七月大地震山崩れ河川埋む海面傾ふく陸をひたせりと云ふことあり此地ならんか八十年前まで鮫魚骨あり識者は此海岸に近來生育せざる大魚の骨と云ふ方今尋るに之なき故に七百年前の海嘯ならんか No.10 <b>舟折ヶ崎</b> (フネヲレカサキ) 陸前国気仙郡盛町と全郡日頃市村の界に舟折れヶ崎といふ地名あり往古海嘯に舟激浪に押上げられ岩に觸れて舟の折れたるより名称せし地名といふ 考ふるに明応七年の海嘯なるかのことし No.11 <b>舟野</b> (フネノ) 陸前国気仙郡日頃市村字舟野といふ地名に在り昔海嘯の当時激浪のため船数艘打上けられたるよ</p>	<p>り名称せしならん 考ふるに前全断 No.12 <b>鉞臺</b> (クワンタイ) 陸前国気仙郡唐丹村より同郡吉濱村に越る嶮阻なる峠あり大小二山なり一を大鉞臺二を小鉞臺と云ふ大むかし海嘯の当時鉞臺打上けられ在のみ人民皆流亡巡視の者此地の名称をしる能はず故に流れある品鉞臺のみ故名称せしと云ふ 考ふるに天平勝寶或は貞観十一年の頃の海嘯ならんか No.13 <b>舟上場</b> (フナアケバ) 陸前国気仙郡越喜来村字甫嶺乃山上に在り舟上場は海岸より壹里餘の所なり往古大海嘯に逆浪の爲め舟押上げられたる故に名称せしと云ふ 考ふるに弘仁貞観両度の海嘯の当時なるか No.14 <b>大舟ヶ崎</b> (オフネカサキ) 陸前国気仙郡越喜来村に字大舟ヶ崎と云ふ所あり海岸より三拾丁餘奥の山上に在り往古海嘯の当時錯を引て大舟を山上に打上けられたる所なり考ふるに明応七年海嘯なるか No.15 <b>大舟澤</b> (オフネサハ) 陸前国気仙郡越喜来村字崎濱より宇洞に越へトロハイ峠の澤に在り往古大海嘯の際船の激浪のため打上けられたる所故に名称せしなり海岸より凡壹里餘當時の海嘯は激浪寄濱より宇洞を越えたりといふ 考ふるに貞観十一年の海嘯なるやの如し No.16 <b>牛轉</b> (ウシコロビ) 陸前国気仙郡唐丹村字荒川濱の北に当り牛轉びと云ふ地名あり昔海嘯の際激浪に打れ牛の落ちたる所なり故に名称す 考ふるに慶長十六年の海嘯ならん荒川濱は慶長四年迄は戸数百二十戸余の町にして町の内中の町と云ふ所在り方今は謹々十三四戸のみ故に慶長十六年海嘯に流亡せしもの如し No.17 <b>蛸カラカイ</b> (タコカラカイ) 陸中国上閉伊郡鶴住居村に蛸カラカイといふ地名あり是も昔海嘯の際逆浪に蛸カラカイ打上られたるより名称せし場所と云ふ 考ふるに近くは慶長十六年若くは明応七年の海嘯の際なるへし慶長後明応前後数回の海嘯あれども東北地方記録に乏しきより充分考ふる能はず No.18 <b>ホヤ拾ヒ長根</b> (ホヤヒロヒナカネ) 陸中国上閉伊郡鶴住居村字白濱より大仮宿へる山坂にホヤ拾ヒ長根と云在り往古津浪に打上けられたる所なり故に名称せしなりと云ふ 考ふるにホヤ拾ヒ長根は海面より数百尺も高き地形なり故に慶長十六年の海嘯よりも激浪高きか如し然れば明応七年ならん No.19 <b>槌</b> (ツチ) 陸中国上閉伊郡大槌小槌の地名あるに往古大海嘯に海濱の民屋人口悉く流亡残民来り視察するに地形陥落字地名知るに由なく槌の激浪に打上けられ在のみなり故に槌と名称せしといふ大小槌を分界せしは慶長以來南部の領する所となり制度の整頓より分界せしものなり大小槌元は槌村と唱へたりと云ふ 考ふるに貞観十一年の海嘯なるやの如し又大小槌区分して文字を木へんと金へんに区分したるは後世学者の榮なり No.20 <b>三枚戸</b> (サンマイド) 陸中国上閉伊郡大槌町に在りむかし海嘯に戸三枚流亡ありしより名称せしと云ふ 考ふるに前全断 No.21 <b>白澤</b> (ウスサハ) 陸中国上閉伊郡大槌町字白澤往古海嘯に白激浪に打上られあるより名称せしと云ふ No.22 <b>鯨山</b> (クジラヤマ) 陸中国上閉伊郡大槌町の北に現在する山往古の大海嘯に鯨山の麓に激浪の爲め打あけられたるより該山を鯨山と名称せしといふ同郡大槌</p>
--	---



第1表 『岩手沿岸古地名考』の本文・注(続き)

<p>町より下閉伊郡山田町へ越える峠を鯨峠と云ふ 考るに弘仁貞観の大海嘯なるやのことし鯨山古き唱へなり 或人云ふ此山鯨の形に見るより云ふもあり然るに決して見 えず海嘯の爲め鯨の打上られたるより名称せし方信ちるへ し</p> <p>No.23 油コ淵 (アフラッコフチ) 陸中国下閉伊郡舟越村字田 の濱裏手に南東に当り寄濱と云ふあり山を以て境界せし所 なり坂在り凹の地形往古海嘯に激浪越えて澤谷の内に油め と称する魚多く打込みあるより油め淵と唱へしと云ふ当時 人口夥多死亡すと云ふ故に魚族の名を以て名称せしなり 考ふるに貞観十一年の大海嘯ならん慶長十六年海嘯記録を 見るに明治廿九年の海嘯と此地方畧相似たり</p> <p>No.24 鯨石 (クジライシ) 陸中国下閉伊郡重茂村に十二神山 在り此山に鯨石と云ふ石あり之れは往古大海嘯に鯨打上け たる所故に大岩石在るを以て鯨石と名称せしなりと云ふ 考ふるに十二神山は本郡重茂村中央の高山なり故に白鳳十 二年或は弘仁十年貞観十一年の大海嘯ならむ</p> <p>No.25 鮪畑 (タコハタ) 陸中国下閉伊郡重茂村地名にゴホト ツと云ふ所在り海苔松藻の着々せし石あり往古津浪に鮪逆 浪の爲め打上けられたる畑ならむ 考ふるに明応七年の海嘯ならんか</p> <p>No.26 鯨取場 (フグトリバ) 陸中国下閉伊郡重茂村往古の海 嘯に鯨澤山逆浪に打上られあるより鯨取場と唱へたりと云 ふ 考ふるに慶長の海嘯或は其后ならん本村字里より壹里余の 山沢に在り</p> <p>No.27 舟越タワ (フナコシタワ) 陸中国下閉伊郡重茂村に月 山と云ふ山あり往古大海嘯のとき此所船うち上られ越え たるより名称せしと云ふ此地海面より高さこと四百尺以上 なり 考ふるに貞観十一年の頃の大海嘯ならん本村字鶴磯に野崎 滝太郎の旧記によると祖先の遺言に昔津浪に月山に避けて 家族の命を得たことあり故に三ヶ年目には月山へ登る道 筋を切拂置へしと遺言せり当時は明応ならん慶長の海嘯に も助命せしものと此月山に遁れ登りたりと云ふ</p> <p>No.28 鎌長根 (カマナカネ) 陸中国下閉伊郡津軽石村外山長 根と云ふ山の内鎌長根と云ふ所あり昔大海嘯に此長根は激 浪打上げ鎌の峯もとに見えたるより名称せしなりと云ふ 考ふるに弘仁貞観の大海嘯ならん</p> <p>No.29 ホッキ澤 (ホッキサハ) 陸中国下閉伊郡宮古町黒森山 にホッキ澤と云ふ地名在り之は往古海嘯の当時激浪にホッ キ打上けられたるより名称せしと云ふ 考ふるに黒森山は海岸より数あり之れへホッキうち上ると 云ふ往古弘仁貞観の海嘯ならんと思考せり慶長の海嘯記事 あり見るに昨年海嘯と云ふ事あり此説に畧同じ</p> <p>No.30 鯨ヶ崎 (クワカサキ) 陸中国下閉伊郡鯨ヶ崎町なり中 興大鯨ヶ寄裏鯨ヶ寄崎鯨ヶ崎と数箇村に分区せしも近来鯨 ヶ寄と元のことく名称せしも往古鯨ヶ崎と唱へたる所分割 せしなり此地名往古大海嘯に鯨の先激浪に打上けられる より其当時の名称なるものことし 考ふるに貞観十一年の大海嘯なるへし</p> <p>No.31 舟越 (フナコシ) 陸中国下閉伊郡崎山村字箱石の内に 小字八皮 (ヤノカ) 此近傍舟越といふあり海岸より壹里半</p>	<p>所往古海嘯に舟越へうち上げたる所なり故に舟越と名 称せしと云ふ 考ふるに八波山を越へ打上上げたるならん果して事実 とせば慶長昨年海嘯に比し増さる事数倍なり然れば 貞観前後の大海嘯なるへし</p> <p>No.32 苧巻淵 (ヲマキフツ) 陸中国下閉伊郡田老村々社 の日枝神社の御坂登り三合目に坂切橋あり之れ往古海 嘯に突切たりと云ふ其脇に沼在り之を苧巻淵といふ昔 海嘯のとき婦人機織たる場合に海嘯来り婦人苧巻を背 負ひ遁れたるに再び激浪来り爲めに此所に埋まりたる より名称せしなりと云ふ 考ふるに慶長十六年の海嘯ならん或は明応なるか</p> <p>No.33 越田 (コヘタ) 陸中国下閉伊郡田老村字乙部の内 越田と云ふ地名あり昔海嘯に激浪越へたるより名称せ しならむ 考ふるに慶長十六年の海嘯なり</p> <p>No.34 鉢盛 (ハチモリ) 陸中国下閉伊郡小本村字茂師 (祖 師ナラン) 此近傍に鉢盛と云ふ名称あり往古の海嘯に鉢 の激浪に打上けられたるより名称したりという 考ふるに明応七年の海嘯ならん慶長の海嘯逆浪打上け る場所にあらず茂師海面より二百尺高さ所なり本村字 中野に杉の大木あり枝の八合目苧桶を竹にて造り掛置 く如何となればむかし津浪の当時逆浪打上げ杉の木枝 に掛りたるより紀念に腐朽ちれば更らに造りてかけ置 くなり</p> <p>No.35 鯨畑 (カツハタ) 陸中国九戸郡野田村の内に中澤 山に字鯨畑と云ふ所あり往古海嘯の際鯨打上けられた るより名称せしといふ海岸より廿丁餘山中なり 考ふるに明応七年の海嘯ならん慶長の海嘯と云ふもあ れとも十月なる故如何や然れも方今は十月に或る地方 に鯨漁あるを見れば慶長と云ふも可ならん</p> <p>No.36 海鹿澤 (イルカサハ) 陸中国九戸郡宇部村字久喜 より北に当り此名称あり昔海嘯に海鹿激浪にうち上ら れたるより名称せしと云ふ 考ふるに慶長天和の海嘯ならん</p> <p>No.37 鍋倉 (ナベクラ) 陸中国九戸郡中野村に熊野神社 あり其脇に鍋倉と云ふ地名在りむかし海嘯のときに鍋 逆浪に打上られたるより名称せしといふ 考ふるに慶長十六年十月廿八日の海嘯なりといふ</p> <p>No.38 フタ渉り (フタワタリ) 陸中国九戸郡中野村熊野 神社の脇に鍋倉といふ地名あり其脇にフタ渉りと云ふ あり之れに澤水の流れあり其澤の小川に昔海嘯の当時 鍋蓋流れあるより名称せしと云ふ 考ふるに前全断</p> <p>No.39 蛸澤 (タコサハ) 陸中国九戸郡中野村字小子内に 蛸澤といふ地名あり往古の海嘯に蛸打上られたるより 名称せしならん 考ふるに慶長十六年十月廿八日海嘯のよし</p> <p>No.40 布沢 (メツカサハ) 陸中国九戸郡中野村字小子 内蛸澤より水上に布澤と云ふ在り昔海嘯の当時昆布押 あけあるより名称せしといふ海岸より凡そ拾四丁餘の 所なり 考ふるに慶長年間の海嘯なるか</p>
--	--

注：□は判読不明文字を表わす。地名右の括弧内は地名のヨミを表わす。原典では、淡染の読みは記されていない。

第2表 津波地名の分布

郡名	村名	現在の市町村名	件数
九戸郡 (岩手県)	中野村	洋野町	4
	宇部村	久慈市	1
	野田村	野田村	1
	小本村	岩泉町	1
下閉伊郡 (岩手県)	田老村		2
	崎山村		1
	鍬ヶ崎町	宮古市	1
	宮古町		1
	津軽石村		1
	重茂村		4
	船越村	山田町	1
上閉伊郡 (岩手県)	大槌町	大槌町	4 <sup>(注1)</sup>
	鶯住居村	釜石市	2
	唐丹村	釜石市	2 <sup>(注2)</sup>
気仙郡 (岩手県)	越喜来村		3
	盛町	大船渡市	1 <sup>(注3)</sup>
	日頃市村		1
	末崎村		1
	広田村		4
	小友村	陸前高田市	1
	気仙村		2
本吉郡 (宮城県)	小原木村	気仙沼市	1

注1：1件は山田町との境

注2：1件は吉浜村との境

注3：日頃市村との境

「明治三十年八月」と記されており、序文や本文は津波後1年程度の間執筆されたものと考えられる。このことから、中表紙の署名は序文や本文とは異なる時期に書かれたものであることが分かる。そして、署名の日付にある1903（明治36）年は、山奈が一連の資料群を帝国図書館に寄贈した年であることから（前川2012）、中表紙の記述は寄贈の際に記されたものであると考えられる。なお、上述の山奈の署名は遠野博物館本にはみられず、代わりに「此書□書は帝国図書館に献納せり」（□は判読不明文字）という旨の記載が認められる。これは、国会図書館本を帝国図書館に寄贈した旨を覚書として記載したものではないかと思われる。

次に、序文に書かれてある内容を整理すると、「調査立案の契機」、「現地調査で得られた情報」、「津波地名の成立に関する考察」、「『岩手沿岸古地名考』編纂の動機」の4点にまとめられる。第1に、1896（明治29）年明治三陸地震津波の惨状に直面し、山奈が三陸調査を立案した経緯が記されている。「其惨状の極実に筆紙の及はざる所なり」の記述からは、得も言われぬ被害の大きさに衝撃を受けている様子が窺える。第2に、「当時里人考夫に問ひ□か口碑に伝はる事のみを集め本書を編纂せり」と、現地の住民の言い伝えを収集して本書が編纂されていることが述べられている。

第3に、「事実或は確然せざる所ありと雖とも」と、本書掲載の地名の由来伝承を事実かどうか疑いつつも、津波地名の成立過程が想定されている。序文の記述には「往古大海嘯の当時海浜の部落全体流亡せし事一にして足らず流亡の後視察者其地名の問ふへき由なく

其地にある流品を以て杜撰の地名を附したるは当然の事実なるか如し」とあることから、津波によって集落の全員が流されてしまったために、被災後の視察者が地名の把握に難儀し、流された物品をもとにして簡便な（本書では「杜撰な」）地名が付けられたのも当然であろうと、具体的な想定の内容が読み取れる。第4に、「故に余公務の餘業として耳朶にせしものを筆記し後世学者の参考に供す」と、後世の学者の参考に資するよう、津波地名について聞き取った内容を書き留めておいたという本書編纂の動機が述べられている。

序文の文面も遠野博物館本と国会図書館本とを見比べてみると、文意は変わっていないが、言葉が多く足されて文章表現が豊かになっており、後世の人間に読まれることを意識して本書編纂の経緯を、言葉を尽くして伝えようとしたことが窺える。この点を踏まえると、本書の帝国図書館への寄贈も、そうすることが後世の人々の目に触れる機会も増えると思える。山奈が見込んだためではないかと思われる。

#### b. 地名の分布、空間スケール、由来

山奈によって書き残された40件の地名について、本研究で翻刻された国会図書館本（第1表）を参照しながら、地名の分布、空間スケール、由来の観点からみていきたい。まず、郡別に地域的な分布の特徴をみると（第2表）、旧陸前国の本吉郡が1件、気仙郡が15件、旧陸中国の上閉伊郡が6件、下閉伊郡が12件、九戸郡が6件で、気仙郡や下閉伊郡が多かった。細かく町村ごとの内訳をみると（第2表）、気仙郡広田村や上閉伊郡大槌町、下閉伊郡重茂村、九戸郡中野村が4件と最も多く、次いで、気仙郡越喜来村の3件、気仙郡気仙村、日頃市村、唐丹村（1件は吉浜村との境の峠）、上閉伊郡鷓住居村、下閉伊郡田老村が2件と続いた。そして、本吉郡小原木村、気仙郡小友村、末崎村、下閉伊郡船越村、津軽石村、宮古町、鋸ヶ崎町、崎山村、小本村、九戸郡野田村、宇部村が1件という内訳であった。広田村や大槌町、重茂村、中野村が4件で多く、逆に沿岸部でも赤崎村（現、岩手県大船渡市）や綾里村（現、岩手県大船渡市）、田野畑村（現、岩手県田野畑村）など1件も掲載されていない村もみられた。

次に、地名の表す空間スケールは、大字とそれよりも小さいスケールのものに大別される。大字スケールは「鋸ヶ崎」と「槌」（大槌町の「大槌」「小槌」）で、残りの38件は大字よりも小さいスケールの地名（山の名称も含む）であった。ただし、「鯨石」は、地名としてではなく、石の名称として紹介されている。続いて、それらの地名の漢字が表す場所に注目してみると、漢字によって場所の地理的特徴が推測できる地名のうち「沢」のつくものが6件と最も多く、次いで「淵」、「田」、「崎」、「畑」、「長根」、「倉」、「場」の2件、「野」、「台」、「山」の1件が続いた。これらの地名は、「台」や「山」、「長根」、「倉」などの「山・峠」系、「沢」や「淵」などの「谷」系に大別される。このほか、漢字で分類すると、「舟」という字を持つもの（「舟野」、「舟越タワ」、「舟越」など9件）と、「越」という字を持つもの（「舟越タワ」、「舟越」、「越田」の3件）が目立つ。

最後に、津波由来の内容についてみると（第1表）、何らかの物体が津波によって打ち上げられたり、流れ着いたりした結果、その物体の名称をもって場所を呼びならわすようになったという種類の話が40件中36件と圧倒的な数を占めている。これとは異なる種類の話としては、津波の際の激浪により牛が転び落ちてしまったところ（「牛転」）、津波が越えたところ（「越田」）、集落の集まりに参加していた住民が助かるという逸話に由来するとこ

ろ（「集り」）、芋巻を背負う婦人が津波に遭うという昔話に由来するところ（「芋巻淵」）を確認できるのみである。

具体的に、打ち上がった物体をみると、鯨、蛸、カラカイ（エイの一種の「カラゲイ」）、アイナメ（本書では「油め」）、ホヤ、イルカ、鮫、フグ、鰹、ホッキなどの魚介類か、昆布のような海藻か、牛や馬などの家畜か、鍋、戸、鍬、鎌、臼、舟、槌、鍋蓋、鉢などの生活・生業のための道具類かに分けられる。これらのことから、山奈が収集した地名の多くは、魚介類、海藻、道具類が山や峠の上、あるいは谷沿いに打ち上げられることで名付けられた小地域レベルの地名であったといえる。

### c. 注記

山奈は、各地名について由来の中で語られている津波がいつのものを推察し、注記を付している。第1表では、各地名に関する記述の改行された箇所が注記に該当する。注記で挙げられた津波は、662（白鳳12または白雉12）年、749-757（天平勝宝）年間、821（弘仁11）年<sup>4)</sup>、869（貞観11）年<sup>5)</sup>、1185年8月（文治元年7月）、1498（明応7）年<sup>6)</sup>、1611年12月2日（慶長16年10月28日）、1628年2月11日（寛永5年1月7日）、1681-1683（天和）年間に発生した地震によるものである。1つの津波について複数の候補が挙げられる場合もあるが、登場回数は延べ慶長17回、貞観13回、明応11回、弘仁6回で、白鳳（「鯨石」）、天平勝宝（「鍬台」）、文治（「鮫田」）、寛永（「駒込メ」）、天和（「海鹿沢」）は1回ずつであった。ここからは、三陸沿岸で発生した津波災害として比較的大きかったと考えられている、平安時代の貞観地震や江戸時代の慶長地震の時の津波が挙げられる頻度が高いことが分かる。ただし、今日の研究では三陸沿岸に被害をもたらしたことが確認されていない明応や弘仁の津波も、比較的多く挙げられている。

このように、慶長以外の津波はほとんど江戸時代よりも前の時代のものが挙げられる傾向にある。山奈の推察の根拠は、たとえば、「集り」や「岩鞍」の由来については、慶長の検地帳に字名が記載されていることから、地名の成立はそれ以前と推定して明応の津波と関連付けている。また、「牛転」のように、その地名のある荒川浜（現在の釜石市唐丹町を流れる熊野川の河口付近）での被災記録をもとに慶長の津波を挙げたりした。さらに、各地名の由来を、明治三陸地震津波の到達地点を基準に、それと同等の標高の地点を示す地名であれば慶長地震津波、明治の津波よりも標高の高い地点を示す地名であれば貞観や明応の地震津波、とそれぞれ関連付けようとしている。山奈自身も嘆いているが、平安時代や室町時代の津波はともかく、江戸時代の津波ですら記録に乏しいという状況にある。そのため、いずれの由来も決定的な根拠を示すことが困難であることから、山奈の大胆な推察が目立つ内容となっていることは否めない。

過去の津波については、上記、第3.1節(2)aで紹介したように、山奈が当初から調査項目の1つに挙げており、その結果は『岩手県沿岸大海嘯取調書』の中で報告されている。そこで挙げられている津波は、過去の津波災害の中では比較的資料が残されている慶長の地震津波のほか、聞き取りによっても確認できる江戸時代後期のものが多い。これに対して、山奈が『岩手沿岸古地名考』で推察した津波は、聞き取りや古文書でも示されることが少なくなる、より古い時代の津波が挙げられる傾向にある。このことから、真偽のほどは不明としつつも、山奈は津波地名に、文献などでは把握しにくい、より古い時代の歴史

第3表 『岩手沿岸古地名考』と旧版地図に基づいて特定可能な津波地名の位置精度

旧版地図による 位置特定可能	旧版地図による位置特定不可能		
	小字レベル	大字レベル	山レベル
4. 舟荒 6. 集り 7. 岩鞍 11. 舟野 12. 鉄臺 19. 槌 20. 三枚戸 21. 白澤 22. 鯨山 30. 鉄ヶ崎 33. 越田	2. 朽舟 3. 鍋在り 5. 駒込メ 8. 淡朶 13. 舟上場 16. 牛轉 31. 舟越 32. 苧巻淵 39. 蛸澤 40. 布カ澤	1. 鮫ヶ淵 9. 鮫田 10. 舟折ヶ崎 14. 大舟ヶ崎 15. 大舟澤 17. 蛸カラカイ 18. ホヤ拾ヒ長根 23. 油コ淵 25. 鮎畑 26. 鮎取場 34. 鉢盛 35. 鱈畑 36. 海鹿澤 37. 鍋倉 38. フタ涉り	24. 鯨石 27. 舟越タワ 28. 鎌長根 29. ホッキ澤

数字は表1のNo.を表す。

的な津波の教訓を託そうとしたのかもしれない。

### 第3.2節 現地調査

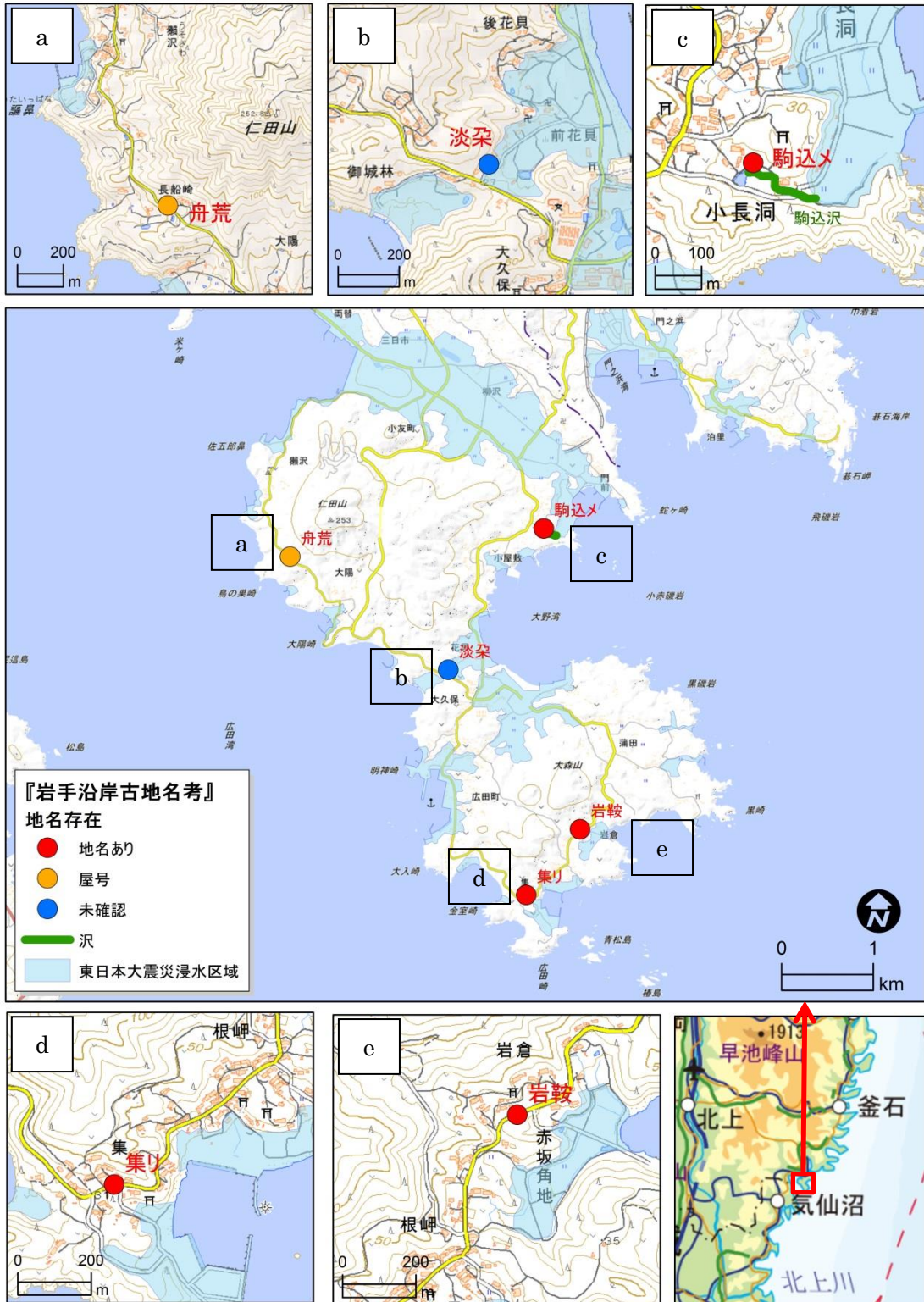
本節では前節における資料批判を踏まえ、『岩手沿岸古地名考』に掲載された40件の津波地名が現在に引き継がれているかを現地での聞き取り調査に基づいて検証する。

#### (1) 地形図上での位置特定

津波地名が指し示す場所の推定は、山奈が書き記した地名の由来に関する記述、とりわけ空間スケールを示す情報に依存している。たとえば、第1表中「No.1 鮫ヶ淵」には、「岩手県は宮城県の境陸前国本吉郡小原木村の山谷に在る此地鮫ヶ淵と称し小原木村海濱より凡壹里拾丁許の山奥の澤に在り往古大海嘯の際激浪のため鮫魚うち上げられ居りたるより名称せしむといふ」との記述がある。ここには、鮫ヶ淵が小原木村の中にあることが示されているが、詳細な場所に関する説明としては「小原木村海濱より凡壹里拾丁許の山奥の澤に在り」とだけあり、その他の地名に関する情報は記述されていない。この場合、上記の地理情報を頼りに、鮫ヶ淵の場所を探す現地調査を実施することになる。

そこで調査に先立って、『岩手沿岸古地名考』序文の署名年月日に最も近い旧版地図を参考に、『岩手沿岸古地名考』に記載されている40件の地名の場所を確認した。確認に利用した旧版地図(5万分1)の図名は、八木(大正3年測図)、久慈(大正3年測図)、野田(大正3年測図)、岩泉(大正3年測図)、田老(大正5年測図)、宮古(大正5年測図)、とどヶ崎(大正5年測図)、大槌(大正5年測図)、釜石(大正2年測図)、盛(大正2年測図)、綾里(大正2年測図)、氣仙沼(大正2年測図)の12葉である。その結果、40件の内11件の津波地名の場所が旧版地図上で特定された(第3表中「旧版地図による位置特定可能」列)。

一方で、旧版地図上では確認できないその他29件の津波地名は、旧版地図のみでは位置を特定できなかった(第3表中「旧版地図による位置特定不可能」列)。ただし、これらの



第3図 広田半島

基図：地理院地図



地名についても、山奈が書き記した地名の由来に関する記述を通して、ある程度の位置を特定することができる。この位置特定のレベルとしては、大きく「小字レベル」、「大字レベル」、「山レベル」の3つの類型に分けられる(第3表)。たとえば、上記「No.1 鮫ヶ渚」では現在の大字に相当する小原木村までの言及に留まるが、第1表中「No.2 朽舟」は「陸前国気仙郡気仙村字長部港の山澤に」とされており、より細かい小字レベルでの記述がみられる。さらに、第1表中「No.24 鯨石」は「陸中国下閉伊郡重茂村に十二神山在り此山に鯨石と云ふ石あり」とされているが、十二神山の山頂自体は旧重茂村(現、宮古市)と旧豊間根村(現、山田町)との境界に位置する。このように津波地名が山のどこを示しているのかが記されていない場合、山の山頂、山腹、山麓も含めた範囲を念頭に複数の大字にわたって調査を行う必要があるため、「小字レベル」、「大字レベル」と区別した。

以上の通り、本研究では現地調査に先立って、まずは津波地名の位置を地形図から特定可能な「旧版地図による位置特定可能」と地形図からは特定できなかった「旧版地図による位置特定不可能」に分類し、後者についてはさらに山奈の記述からおおよその場所を絞り込むことができたレベルに応じて「小字レベル」、「旧村レベル」、「山レベル」に分類した上で調査を行った(第3表)。本調査は地域住民に対する訪問面接調査であり、被験者に対しては本調査の趣旨を説明したうえで『岩手沿岸古地名考』に記載されている地名・由来を知っているか否か、また、その他の津波地名とその由来、津波に関する伝承などを知っているかを確認した。

## (2) 地名の残存状況

本調査の結果、確認できた地名が22件(55.0%)、確認できなかったものが18件(45.0%)であった。ただし、前者のうち1件は地名ではなく屋号として確認されたものである。前者22件のうち、津波に由来すると確認できた地名が11件(50.0%)、確認できなかったものが11件(50.0%)であった。本3.2節(2)項では、いくつかの地域を事例として取り上げ、津波地名の残存状況をみていきたい。なお、地図中で利用した東日本大震災時の津波浸水区域は、東京大学空間情報科学研究センターが運営する復興支援調査アーカイブ(<http://fukkou.csis.u-tokyo.ac.jp/>)からダウンロードしたもので、基図は地理院地図である。

### a. 事例1 : 広田半島

広田半島(陸前高田市)には、「4. 舟荒」「5. 駒込メ」「6. 集り」「7. 岩鞍」「8. 淡朶」の合計5件の津波地名が存在するとされている。そのうち「駒込メ」「集り」「岩鞍」は地名として、「舟荒」は屋号として、それぞれ現地における聞き取り調査によって存在が確認された(第3図)。ただし、いずれの津波地名についても由来を知っている住民を確認することはできなかった。

①舟荒: 舟荒は「気仙郡小友村(筆者注: 現、陸前高田市小友町)字矢の浦に舟荒と唱る地名在り」とされているが、現在の地形図には舟荒の記載はなく、大正2年測図「気仙沼」をみると現在の長船崎の付近に位置する(第3-a図)。長船崎に北接する小友町瀬沢の古老(男性、年齢不詳)によると、舟荒は広田町(旧、広田村)長船崎付近に地名ではなく蒲生家の屋号として残されているという。長船崎の蒲生家を訪問するも不在であったため聞き取り調査は叶わなかったが、蒲生家すぐ傍の陸前高田市路線バス矢の浦線のバス停

の名称が「船荒」とされており、ミクロレベルの場所を示す名称としても機能しているようである。その後の訪問先となる臨濟宗妙心寺派慈恩寺（陸前高田市広田町泊）の資料によると、訪問した蒲生家は「船荒の上」と呼ばれ、同長船崎内には「船荒の中」の屋号を持つ住家が別に存在する。『岩手沿岸古地名考』では「往古海嘯の節激浪に打上けられ船の破壊せしより名称せしと云ふ」との由来が記されているが、本調査ではその由来を確認できなかった。なお、舟荒は「フナレ」「フナリ」と読むようである。

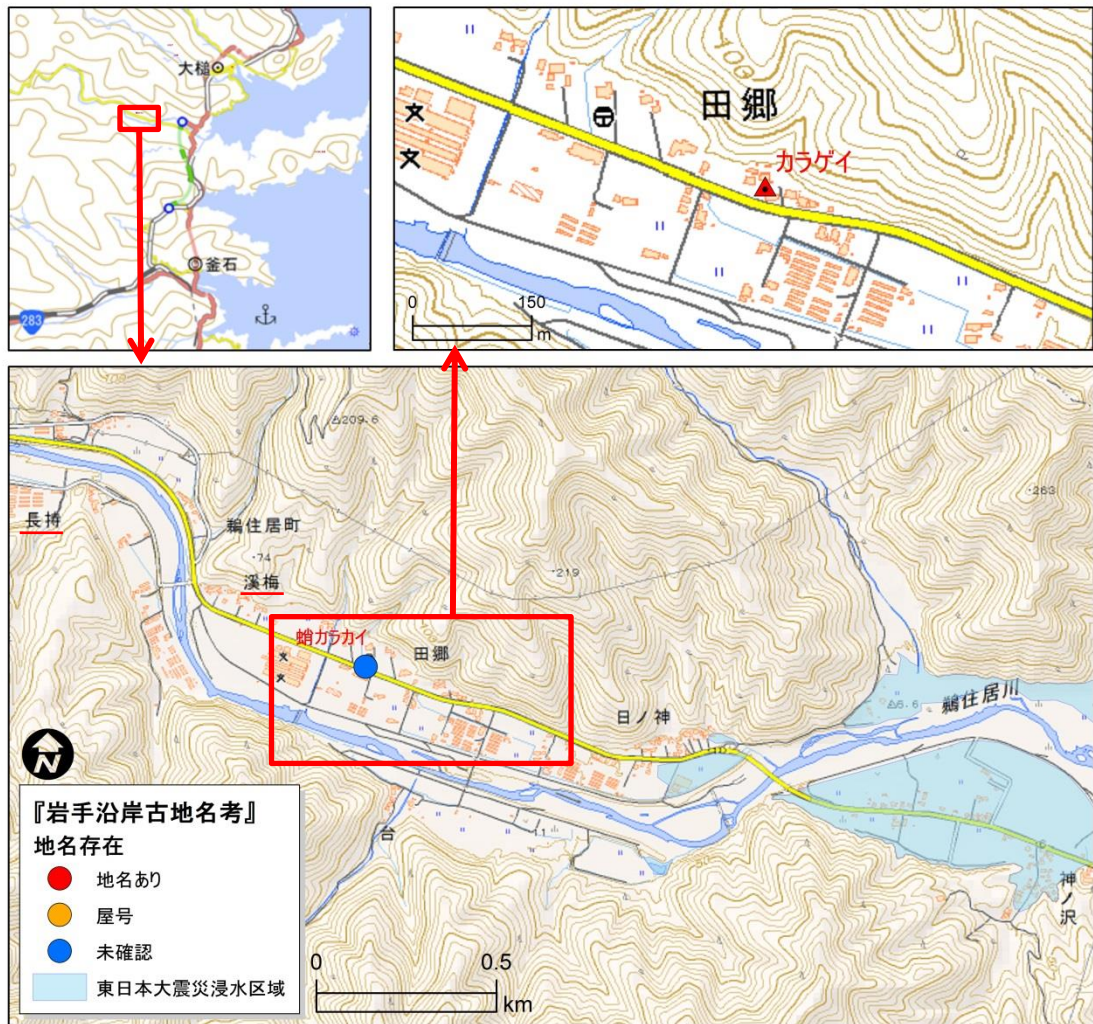
②駒込メ：駒込メは「気仙郡廣田村（筆者注：現、陸前高田市広田町）字長洞の内に在り」とされ、地形図への記載はないものの、説明文中の小字「長洞」は地形図中で確認できる（第3-c 図）。広田町御城林に9代続けて居を構える住家の85歳男性によると、駒込メは長洞にある屋号とされる。また、前出の小友町瀬沢の古老は、駒込メが長洞と小ヶ口との間にある蒲生家の屋号として残されており、その蒲生家は舟荒の蒲生家と親戚だと聞いているという。そこで、広田町長洞の蒲生家を訪ね、在宅中の蒲生家第24代当主蒲生哲氏に面会した。

蒲生哲氏は東日本大震災後、地域の被災者・復興支援に継続して尽力し、2015年9月6日投開票の陸前高田市議選挙では市議会議員となった人物である。蒲生哲氏の復興支援に関する取り組みは、朝日新聞（岩手全県版）の「3・11 その時 そして（No.1034～1050）」において17回にわたって紹介されている<sup>7)</sup>。

『岩手沿岸古地名考』では、上述の由来に、「むかし海嘯の当時駒激浪に打あけられ助りたるより駒込めと名称す昨明治廿九年六月十五日午後八時の大海嘯にも牡馬壹頭激浪に押上られ本村蒲生辰之助取押へ助けたりといふ」と続く。この明治三陸地震津波の際に牡馬を助けた蒲生辰之助は蒲生哲氏の曾祖父にあたり、駒込メは自宅前の沢の名称であるとのことであった。蒲生哲氏からは、駒込メの由来に関する情報は得られなかった。

③集り：集りの住所は「気仙郡廣田村字集り」とされ、現在の陸前高田市広田町集に該当する（第3-d 図）。集の場所自体はあらかじめ地図上で特定されるため、現地では地域住民の間に由来が受け継がれているか否かの確認を行った。集りは、その昔5月5日、漁師が大漁の祝宴を催している際に大津波が集落を襲ったものの、祝宴が催された場所が海面より約50尺（約15.2m）ほどの高さにあつたため、この場所に集っていた人々は命拾いをしたことに由来するという。集の男性住民3名（それぞれ80歳集出身、82歳集出身、80歳根岬出身）からは明治・昭和三陸地震津波を経験して海岸近くの住家が集落内の標高の高い土地へ移動したという話を聞くことができたものの、地名の由来に関する情報は得られなかった。また、山奈によると、調査当時、毎年5月5日に、命拾いをしたことを記念するための御祝い行事が行われていたとしているが、これに該当するとみられる行事も確認されなかった。

④岩鞍：現在、「岩鞍」の表記には「岩倉」の漢字が当てられ、場所は現在の陸前高田市広田町岩倉に該当する（第3-e 図）。場所については地形図にて確認できることから、現地にて、地名の由来に関する聞き取りを実施した。岩倉の地名は「その昔、津波により荷馬の背負う荷鞍が岩の上に打ち上げられていた」ことに由来するという。岩倉の男性2名（中年と古老、年齢不詳）からは地名の由来に関する話を聞くことはできなかったが、そのうち古老によると周辺の海岸や海域には確かに岩や石が多くあるという。この地形的特徴は空中写真からも確認でき、山奈の記述内容とも符合する。



第4図 蛸カラカイ

基図：地理院地図



第5図 田郷バス停からカラゲイ方面を望む

注：2016年7月23日筆者ら撮影

⑤淡朶：淡朶は「廣田大字大野の内」にあるとされるが、新旧地形図では確認できない。淡朶の位置を特定する手掛かりとなる大野の地名も最新の地形図には記載がないが、大正2年測図「氣仙沼」では、現在の前花貝・後花貝に当たる地域で記載を確認できる（第3-b図）。大野の地名自体も、広田半島東側の大野湾、および、前花貝の海岸名に大野海岸として残される。

淡朶について、前出の小友町瀬沢の古老が、「厳密な場所は分からないが、大陽と大野との間に、大野湾と広田湾双方からの津波が合わさったことに由来する『アッタ』が存在する」と言及していたため、両地点の間に位置する広田町御城林で聞き取りを実施した。前出の御城林85歳男性によると、「淡朶は知らないが、大椀田（オワンダ）であれば前花貝に屋号として存在する」という。そこで前花貝に移動し、前花貝に居住する68歳女性（集落外から嫁入り、出身地不明）に聞き取りを行ったところ、その女性も「大椀田は大野湾と広田湾の双方からの潮が合ったことに由来する」とし、そのことを屋号「大椀田」の住民から聞いたとのことであった。その後、その女性に教えられた大椀田を訪問したものの不在であったため、大椀田での聞き取り調査は残された課題である。

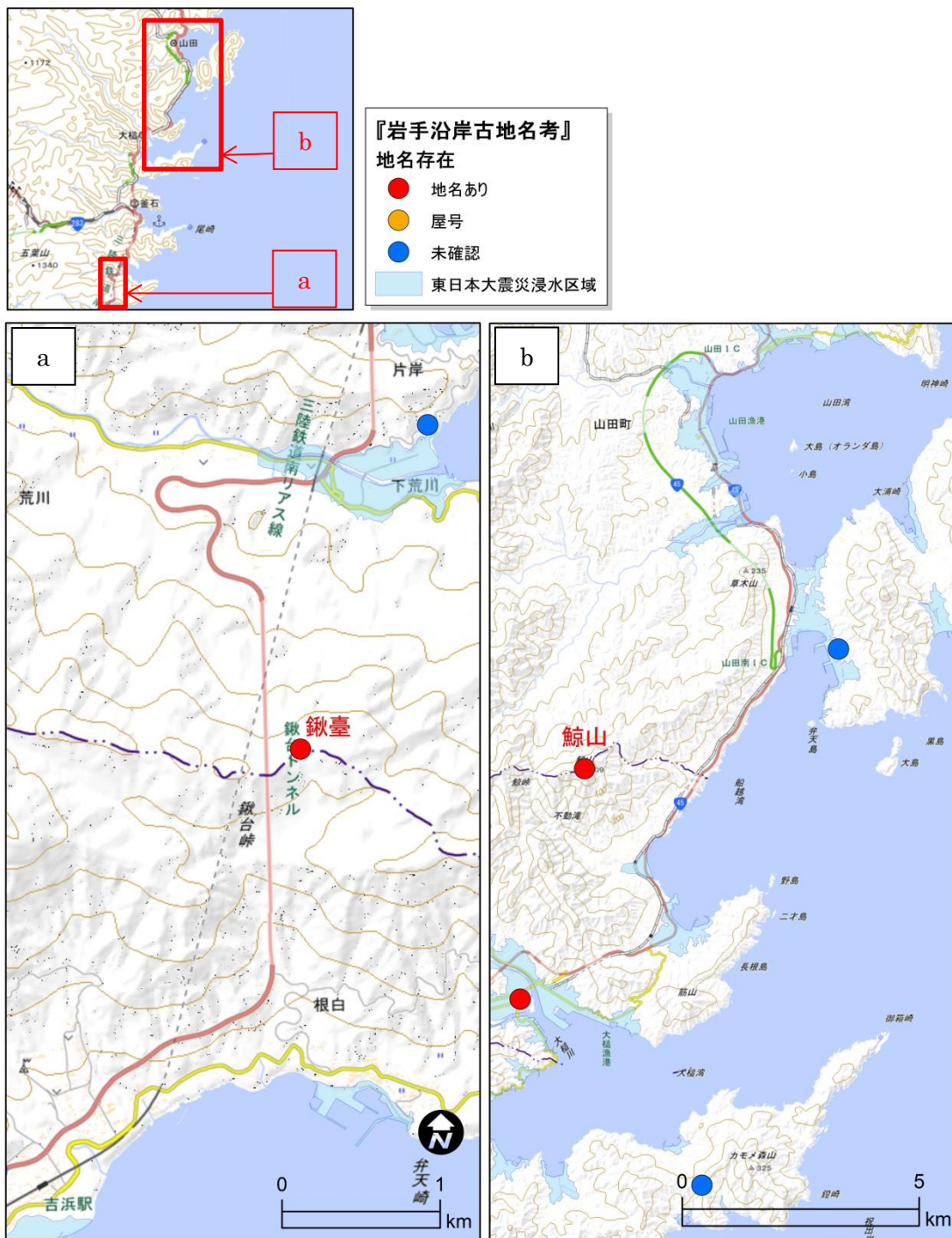
『岩手沿岸古地名考』では淡朶は「大陽と大野との両方よりむかし海嘯に砂石押上げ森と成りたるより名称せしといふ」とされ、瀬沢の古老や前花貝68歳女性の証言から確認される「アッタ」「大椀田」の地で「津波」「潮」が合ったとする地名の由来とも酷似している。地形図をみると大椀田の住家は標高20～30mあたりに位置し、東日本大震災の際に大野湾と広田湾双方からの津波に挟まれる場所に位置している（第3-b図）。さらに、『岩手沿岸古地名考』の国会図書館本、遠野博物館本ともに、淡朶についてのみ読みが振られていない点も、当時、現地の住民も「アッタ」「オワンダ」のように複数の呼称で同一の場所を読んでいた可能性も否定できない。これらの状況を総合的に考えると、淡朶と大椀田が同一であると断言できるには至らないものの、山奈の言う淡朶は現在屋号として残されている大椀田である公算が大きいのではないかと思われる。

#### b. 事例2：蛸カラカイ

蛸カラカイは「上閉伊郡鵜住居村に蛸カラカイといふ地名あり」とされるが、その地名は新旧地形図で確認することはできない。調査前日に宿泊した鵜住居町根浜の漁師民宿で「蛸カラカイは鵜住居川沿いの田郷（タゴウ）とカラゲイのことではないか。タゴウはタコ、カラゲイはエイを意味する」との情報を得たため、まずは地形図上に地名が表記されている田郷にて聞き取り調査を実施した（第4図）。鵜住居町田郷に住んで約35年になる元市役所職員の男性（80歳代）は、「田郷はタコが、カラゲイはカラエイが、それぞれ津波で打ち上げられたことに由来する。カラゲイは田郷のなかの1集落であり、そのなかの1軒の屋号がカラゲイ」と話す。そこで、カラゲイ集落（第5図）に移動し当地出身の76歳女性に聞き取り調査を実施したところ、その女性も地名由来に関して同様の認識であった。2011年度に都留文科大が実施した被災地における聞き取り調査においても、鵜住居川河口部に位置する片岸町在住の女性（1930年生）から同様の話が得られている（高田・田中2014, 56頁）。

これら津波に由来する「田郷」「カラゲイ」と山奈の記録する「蛸カラカイ」との共通点は、いずれもタコとカラエイがその昔の津波で打ち上げられたことに由来する点である。





第6図 鯨台, 鯨山  
基図: 地理院地図



第7図 吉浜から鍬台山を望む

注：2015年12月1日筆者ら撮影



第8図 鍬台峠登山口（唐丹町側）

注：2016年2月25日筆者ら撮影

田郷，カラゲイは太平洋岸から鶴住居川を約 4km 遡った谷底平野に位置しているが，実際に東日本大震災の際にも鶴住居川を田郷に隣接する日ノ神集落まで津波が遡上しており，そこには被災者の遺体も流れ着いたという。これを念頭に置くと，過去の津波で田郷やカラゲイ付近にタコやエイが打ち上げられたとしても不自然ではない。また，前者の 80 歳男性によると鶴住居川の上流にある溪梅（ケイバイ）や長持も，それぞれ蛸貝（ケイバイ）と長持（日本の伝統的な収納家具）が漂着したことによる津波地名とされ，付近にいくつかの津波地名が集っている。これらのことを踏まえると，山奈のいう蛸カラカイは，「田郷」と「カラゲイ」として残されている蓋然性が高い。

それでも，東日本大震災の津波では田郷の集落には津波が到達しなかったこともあり，後者の 76 歳女性は両津波地名の由来はあくまで昔話として解釈し実話だとは認識しておらず，また，子や孫の世代は由来を知らないのではとのことであった。また，カラゲイ内には地名の由来を知らない住民（中年の女性）も存在し，由来の認知には世代間で格差があ



るのかも知れない。

c. **事例3**：山地名—**鋏臺**，**鯨山**—

『岩手沿岸古地名考』には「12. 鋏臺」「18. ホヤ拾ヒ長根」「22. 鯨山」「28. 鎌長根」の4つの山に関する地名が掲載されているが、現地調査ではこれらのうち「鋏臺」「鯨山」の由来を認知している住民を確認できたため以下に報告したい。両山はいずれも周囲より標高が高く（鋏台山 518.8m，鯨山 609.1m，小鯨山 460m），地域の小中学校の校歌（e.g.大船渡市立吉浜小学校校歌：あすの世代をになう子は 望みを高くいだけよと くわ台山の頂に…；旧大槌町立大槌中学校校歌：目路もはるけき太平洋 朝日たださすくじら山…）のなかにも登場するなど、地域の景観を形成する峠や山としてランドマークの役割を果たしている。

①鋏臺：鋏臺は「気仙郡唐丹村より同郡吉濱村に越る嶮阻なる峠あり大小二山なり一を大鋏臺二を小鋏臺と云ふ」とされ、現在の地形図においては釜石市唐丹町と大船渡市三陸町吉浜との境界に鋏台山と鋏台峠を確認できる（第6-a図）（第7図）。山奈の記述によると、鋏臺の名称は、その昔、津波によって住民すべて流され当地の名称が分からなくなったが、そこに鋏台のみが残されていたため鋏臺と名付けられたとされる。この由来が残されているかを調べるために、まず、鋏台の南にあたる三陸町吉浜において吉浜在住の元大船渡市立吉浜地区公民館長（68歳男性，元小学校長）に聞き取り調査を行ったところ、「鋏臺」は地域では「カンデ」と呼ばれ、鋏の柄を意味するという。ただし、山奈の記述にあるような由来は認識されていなかった。また同じく吉浜在住の郷土史家（初老男性）に聞き取り調査を行ったが、鋏台の名称が津波由来であるとする情報については有していなかった。

一方で、吉浜から鋏台を挟んで北側に位置する釜石市唐丹町上荒川の72歳男性（釜石市文化財保全審議会委員）によると、その昔、津波で鋏が流れ着いた場所が鋏台と名付けられ、その場所は唐丹町下荒川にある鋏台峠への登山口のことではないかという（第8図）。また、唐丹町荒川生まれで、東日本大震災による津波被災のため上荒川に移住した古老（昭和3年生，女性）も、いつの津波によるかは不明としつつも、鋏台の由来に関する話を聞いたことがあるとのことであった。ただし、中年以下の年齢層では鋏台の由来を認知している住民を確認できず、必ずしも唐丹町において一般的に伝承された知識であるとも言えない。

②鯨山：鯨山は「閉伊郡大槌町の北に現在する」とされ、現代の地形図では大槌町と山田町との境界線上に「鯨山」、またその南側に「小鯨山」として確認できる。山奈によると、その昔、鯨山の麓に大津波で鯨が打ち上げられたことにより名付けられたとされる。鯨山・小鯨山の麓にあたる大槌町吉里吉里浪板地区における聞き取り調査によると、鯨山の名称が津波等によって鯨が打ち上げられたことに由来することは比較的知られているようである。浪板在住の初老男性は、「真実な否かは定かではないが、津波か何かで鯨が山に打ち上げられた」とし、同じく浪板在住の中年男性も、その昔、津波か何かで鯨が打ち上がったという話を、幼いころに地域の年寄りや先輩から聞いたという。さらに、浪板にある和菓子屋「もりかまど」の女将（山田町出身，中年女性）も、「鯨山は山田町の方からも見え、鯨山に鯨が打ち上げられたのは津波の時だと思う」と話す。鯨山の標高は609.1mほどあり、

浪板から北東方向に約 6km 離れた船越半島からも鯨山の雄姿を確認できる。山田町船越田の浜にある瑞然寺の住職（初老，男性）も鯨山の由来について認知しており，鯨山の由来については大槌町から山田町にわたって確認できる。

ただし，鯨が打ち上げられたとする場所については，山麓なのか山頂なのか，地域住民間で共通の知識として共有されていないようである。鯨山に関しては地域のランドマークの役割を果たしていることから，比較的多くの地名本で紹介されている。そのなかで『岩手の地名百科』では津波に関連する由来は掲載されていないものの，その他の書籍では何らかの形で津波に関して言及されている。『角川日本地名大辞典 3 岩手県』（角川書店，1985 年）では「上閉伊郡大槌町と下閉伊郡山田町との境にある山。…＜中略＞…当山の南には標高 458m の小鯨山があり，対をなす。大津波の時に，雄鯨と雌鯨が寄せて来て 2 つの山にとどまったという伝説もある。」の記述が見られるほか，岩手県内の地名・地誌に関する書籍を多数執筆している小島俊一はおもに地名の音韻から解釈を行いつつも，津波による由来についても言及している（小島 1977，40，98 頁；小島 1981，29 頁；小島 1982，52-53 頁；小島 1996，176-177 頁）。

岩手県内の近世近代の地誌が記された書物においても，鯨山に関する説明を確認できる。小島の文献でたびたび引用されているのは，幕末から明治の南部藩内の地誌が記載された『奥々風土記』であり，鯨山の由来として「昔大津波の時，雄鯨雌鯨二つ，潮のまにまに寄来て，此両嶺にとどまれり，故に山の名には負へりとなん」との記載がある。ただし，明和-寛政年間に執筆された『邦内郷村志』においても同様の説の記述はあるものの，その記述は「恐可<sub>レ</sub>伴也」でめられており，津波によって鯨が山頂まで押し上げられたというのは，あくまでも伝説上の話として捉えられていたようである。

## 第 4 章 おわりに

本稿では，1896（明治 29）年の明治三陸地震津波の発生後，いち早く被災地を踏査した山奈宗真が書き残した『岩手沿岸古地名考』に着目し，本書の書誌学的検討（Step1），および本書に掲載されている 40 件の津波地名が現在まで受け継がれているか否かの現地調査（Step2）を実施した。本研究の成果は，以下の通り整理できる。

Step1 では，『岩手沿岸古地名考』の遠野博物館本と国会図書館本の翻刻，両者の比較検討を通して本書の内容を検討した。山奈が書き留めた津波地名は，地名の読みや由来など，山奈による調査当時，すでに曖昧な点が含まれていたとも解釈できる点に留意すべきである。また，依然として国会図書館本にも誤記と思われる箇所がいくつかみられたことから，分析内容によっては，両者を照合して両者の差異を比較検討する必要性も認められた。ただし，これら留意すべき点があるものの，本書は当時の三陸沿岸住民によって認識されていた津波地名が記録されている限られた史資料であり，当時の人々がどのように身近な災害リスクを認識していたのかを探る学術的に貴重な資料であると考えられる。

Step2 では，Step1 での資料検討を踏まえ，現地での聞き取り調査に基づいて，現在まで 40 件の津波地名が残されているか否かを検討した。その結果，40 件のうち 22 件（55.0%）で確認できた。ただし，この 22 件の津波地名のうち山奈の記した由来が残されていること

を確認できたのは 11 件である。これを踏まえると、大半の地名では由来を確認できず、時間が経過するにつれて人々の記憶から消し去られている状況を確認できる。この現象は、地域の象徴となっている山地名であっても例外ではなく、地域のランドマーク的存在ともなっている鍬台山・鍬台峠の由来を知っている中年以下の住民を確認することはできなかった。ただし、鯨山については少し状況は異なり、若い世代に受け継がれている様子を確認できた。そこでは、鯨山に鯨が打ち上げられた場所の真偽については特に問われず、物語として地域に受け継がれる状況が見られた。さらに、蛸カラカイに見られるように、山奈が記述した由来と同じ地名が、別の地名として残されている現状も確認された。これについては、津波地名自体、山奈が明治三陸地震津波の調査の合間に入手した副産物であることを考えると、山奈が「田郷」「カラゲイ」を「蛸カラカイ」と記録ミスした可能性も考えられなくはない。山奈が書き残した津波地名の記録の活用可能性については、災害文化の継承という持続可能な地域社会のあり方を考える中で引き続き検討していきたい。

謝辞：本稿の作成にあたり、阿部信代氏をはじめとする遠野市立博物館の皆様、立命館大学文学部卒業生の小田美鈴さんにお世話になりました。関根良平先生、阿部隆先生をはじめとする東北大学地理学教室の先生方、学生の皆様にはフィールドワークで多大なご支援を賜りました。記して感謝申し上げます。

#### 注

- 1) 「日誌」は田面木（1986）で翻刻されている。
- 2) 山奈は調査時に古文書の書写を行っているが、それを集成したものが、『岩手県海岸巡回古文書拾集録』としてまとめられている。
- 3) ここで、「修正」とは遠野博物館本で校正の指示を行って、国会図書館本でそのとおりに変更されたもの、「変更」とは遠野博物館本で指示がないのに国会図書館本で変更されたものをいう。
- 4) 国会図書館本において弘仁 10 年と記載されている箇所がみられるが、遠野博物館本では弘仁 11 年と書かれていることから、国会図書館本の作成にあたって「十一」の「一」が書き漏らされたと考えられる。
- 5) 注 4 と同様の理由で、国会図書館本の貞観 10 年は貞観 11 年の誤記と考えられる。
- 6) 400 年前とあるので明和は明応の誤りと考えられる。
- 7) 「朝日新聞（岩手全県版）」2014 年 3 月 7～23 日

#### 文献

- 蝦名裕一・今井健太郎 2014 「資料や伝承に基づく 1611 年慶長奥州地震の津波痕跡調査」津波工学研究報告 31, 139-148 頁。
- 蝦名裕一・今井健太郎・首藤伸夫 2015 「山奈宗真『岩手県沿岸大海嘯取調書』に記される近代以前の歴史津波痕跡について」歴史地震 30, 196 頁。

- 遠藤宏之 2013 『地名は災害を警告する—由来を知りわが身を守る—』 技術評論社。
- 小川豊 2012 『あぶない地名—災害地名ハンドブッカー』 三一書房。
- 菊池万雄 1986 「明治 29 年三陸地震津波」 菊池万雄『日本の歴史災害—明治編—』 173-265, 古今書院。
- 菊池万雄 1997 「山奈宗真の明治三陸津波調査記録」 地震ジャーナル 23, 32-43 頁。
- 北原糸子 2014 『津波災害と近代日本』 吉川弘文館。
- 楠原佑介 2011 『この地名が危ない—大地震・大津波があなたの町を襲う—』 幻冬舎。
- 楠原佑介 2016 『地名でわかる水害大国・日本』 祥伝社。
- 小島俊一編著 1977 『宮古閉伊の地名伝説』 花坂印刷工業 K.K.
- 小島俊一 1981 『三陸海岸, 北上山地の地名』 (岩手の地名 上巻), トリョーコム。
- 小島俊一 1982 『岩手の地名ものがたり』 熊谷印刷出版部。
- 小島俊一 1996 『岩手の山名ものがたり』 熊谷印刷出版部。
- 三陸町史編集委員会編 1989 『三陸町史 第 4 巻 津波編』 三陸町。
- 高田研・田中夏子編 2014 『岩手県釜石東部漁協管内東日本大震災に関わる聞き取り調査報告書』 都留文科大学社会学科, 釜石東部漁協管内復興市民会議。
- 太宰幸子 2012a 『地名は知っていた<上>—気仙沼～塩竈 津波被災地を歩く—』 河北新報出版センター。
- 太宰幸子 2012b 『地名は知っていた<下>—七ヶ浜～山元 津波被災地を歩く—』 河北新報出版センター。
- 谷川健一 2013 『地名は警告する—日本の災害と地名—』 富山房インターナショナル。
- 田面木貞夫編著 1986 『遠野の生んだ先覚者山奈宗真』 遠野市教育文化振興財団。
- 中央防災会議災害教訓の継承に関する専門調査会編 2015 『1896 明治三陸地震津波報告書』 内閣府。
- 前川さおり 2012. 山奈宗真の津波被害調査資料を読む. 遠野学 1 : 173-184.
- 山下文男 1982 『哀史三陸大津波』 青磁社。